

第 44 回技術士の夕べ

『意見交換会：部会員の福島支援活動の経験から、住民目線のリスク・コミュニケーションを考える』

1. 趣旨

原子力・放射線部会では設立 10 周年を迎えた昨年 6 月、今後 10 年に向けた「活動方針」を取纏めました。その際、技術士の将来像として、技術士が社会で生き生きと活躍することにより原子力界全体の健全化と社会からの信頼回復に貢献することを一つの目標として認識致しました。そのためには、「専門家」としての、また「人」としての「技術士」の在るべき姿を一人ひとりが明確に自覚するとともに、「技術士＝信頼される技術者」ということを社会に定着させることが必要と考えております。

さらに本年度下期からは、将来像をきちんと見据えながら、自分たち自身の資質向上から始めるための活動をキーワードに具体的な取り組みを計画し、1 月の「安全文化と技術者倫理を学び直す取り組み」に続き、今回の「部会員の福島支援の経験から、住民目線のリスク・コミュニケーションを考える」を取り上げました。

我々は、東電福島第一原発事故以降、一時帰宅プロジェクト、自治体支援、避難者支援、除染情報プラザ協力等種々の直接的な支援活動を行ってきました。また、一般の人々や原子力・放射線以外の専門家に福島状況を理解して頂くために、知の市場への協力、技術士への放射線基礎講座の連載、CPD 教材の執筆、技術士フォーラムの企画等の間接的な支援活動も行ってきました。しかし、部会からの情報発信、住民の方々とのリスク・コミュニケーションの双方において、社会との接点を期待されてきたはずの技術士が、自ら持つ公益確保や中立性のメリットを十分に生かしきれず、如何に専門知を伝えるかという課題に苦慮致しました。

一方、震災直後から主体的に動いた他機関(放医研他の法人、保物学会他の学協会、原子力学会シニアネット等)、地方紙、NPO 法人や注目を浴びた個人の活動等の取り組み、チェルノブイリの経験を反映した ICRP のダイアログセミナー等の取り組みを学ぶと、成功事例における共通因子も見えてきます。

本会合では、上記の事前調査を踏まえ、被災された住民や一般の人々とのリスク・コミュニケーションの在り方を考えるきっかけとして、部会員の福島支援活動から 2 件、放射線防護の第一人者である専門家の経験から 1 件を選定し、ご講演頂くことと致しました。本公演を受けて、「専門家」としての、また「人」としての「技術士」は今後どのような活動を行っていくべきかを皆様とともに考えていきたいと思っております。

2. 次第

I. 講演会・意見交換会の趣旨 及び講師のご紹介

佐々木 聡 (原子力・放射線部会 部会長補佐、広報幹事)

II. 講演

(1) 当部会員の福島支援活動から

(1)-1: 福島からの避難者との対話活動から

中田 よしみ (原子力・放射線部会 広報幹事)

(2)-2: 福島県内での活動、除染情報プラザへの協力

高橋 一智 (原子力・放射線部会 広報幹事)

(2) 他機関、個人の福島支援活動から (専門知を住民に伝える取り組みとしての参考)

演題:「放射線をいかに語るか 福島事故の経験から」

講師:伴 信彦 氏 (東京医療保健大学 東が丘・立川看護学部 教授、ICRP(国際放射線防護委員会) 第一専門委員会委員、UNSCEAR(原子放射線の影響に関する国連科学委員会) 日本代表団 アドバイザー、日本保健物理学会 前理事「暮らしの放射線 Q&A 活動委員会」元委員長)

III. 意見交換会

上記講演を受けて、以下の3つの視点で意見交換を行う。

- ① 原子力・放射線に関する専門知を、被災された住民、一般の人々、他分野の技術者に伝えるために、技術士は自らの言動に関して何に気を配り、どのように行動すべきか?
- ② クライシスコミュニケーションのために、平時より、個人として部会として何を準備しておくべきか?
- ③ 福島の復興のために、技術士は自らをどう位置づけ、どのような活動を行っていくべきか?

なお、ご意見の趣旨を皆様に円滑に理解して頂くためには、ご発言頂いた方の背景や具体的な支援経験の有無等の情報を共有する必要があります。そのため、発言の最初に、①ご専門、②支援経験やリスク・コミュニケーション活動等の経験の有無とその内容、③発言を誘起した今回の公演内容への具体的な感想を頂いた上で、ご意見を頂くことと致します。

また、事前にメールにて頂いたご意見もこの場で紹介いたします。その際は、4.参考情報をご覧になった上で、同様にご意見を頂けますようお願い致します。

ご意見の送付先 : nucrad20150306@gmail.com 高橋一智 (J-PARC センター)

3. 自己評価

今回の意見交換会の議論を取纏めHP上で公表する。その考えを基に、技術士個人として部会としての実践活動を行い、H27 年度末頃を目途に同様の意見交換会を行い、自己評価する。